

「夏はしまほむまで」

外庄・内庄の

ほむまで

に抱い。農村は日本人の原風景とでもいふかな。いつか農業をやりたいと考えていた。それに、今は大量消費に自然破壊——。効果だけが物差しの上業中心社会。学校も五十分のテストで何点取れるかが勝負。何か違うぞ、自分できるところはないか、と考えると農業だった。いまの暮らして「水も空気も食べ物もうまい。人間の基本とかな、農業は心がびのびするよ。教師時代と全然違ろ」と話す。

農水省によると、八〇年から八八年までの間に脱サラなどで農業以外の分野から新たに農業を始めた人は全国で四百六十六人。

カルンダーも人気

日本各地の代表的な水田風景や農村行事を集めたカルンダー「日本の米」(ジャパン・プレス・フォト発)

かつて、淡い赤紫色のレンゲは農村の春の田を埋め尽くすにすぎなされた。田植まえに、肥料として田が、いま復活している。

岡山市平山地区のレンゲ作りの無農薬のイチゴ栽培と低農薬米に取り組み多田さんらの「農業はまず土作り。レンゲはどうやる」という発案でスタートした。首都圏をはじめ、長野県や滋賀県などの無農薬や低農薬の米作りに取り組み地域にレンゲは広まっている。農水省によると、肥料用のレンゲ作付面積は八九年一、二六千畝、九〇年一、七千三百畝となっている。

農水省は九〇年度から水田の減反を一段と強化。このため、なにもつられていない「放置田」が全国で推定四万畝にまで増加した。特に東京、大阪、名古屋などの大都市圏近郊で自立

「子供らが目の色を変え、一ターの中園長行調査役。一面のレンゲの中をターと走り出はだんだん減っていくとばかりすの。見てるだけで胸が熱く、思ってたが、増えている。都なります」と岡山市東古松の主婦坪井貴美子さん(四〇)。同市平山地区は四年前からレンゲまつりを始め、去年は五千人が参加、大阪などから観光バスが乗り入れるほどの人気だった。このレンゲ作りに取り組み平山観光農業を育てる会の世話人、多田甚大さん(六三)は「都会の人たちは想像以上に自然との触れ合いに飢えていることがわかりました」といふ。

都会と農村の、さまざまな交流が広がる中、触れ合いだけではあきたらず、農村に入り込んでしまふ人も少しずつ増えている。

レンゲ

今井和夫さん(三三)は大阪で六年間続けた中学校教師をやめ、八九年四月から兵庫県千種町で約三ヘクタールの田畑と有精卵の養鶏場を経営している。

一般的な会社員の家庭に育ち、農業を何も知らなかった今井さんを駆り立てたのは、子供に「まだ身近に残っていた田んぼや畑で遊んだ思い出。」「虫捕りの遊びや稲わらを焼く

田んぼの風景戻る

有機農法が普及 美しさでも脚光

増える脱サラ農家

八七年、東京・有楽町の全国農業会議所に新規就農ガイドセンターが開設された。「農業を始めたいのだが」と相談に訪れた人は八九年度末までに千七百十九人。三十四代の会社員や公務員が多い。

「人間性の回復、自然願望や人間関係の悩みなど都市生活への反発もあるのでは」と同セン

「水田を、生活環境の一部としても生かしたい」

「水田を、生活環境の一部としても生かしたい」

風景なんて考えられ

んぼのないふるさとの

土まなも祭りも消えてしま

うだろう。だいたい、田

んぼのないふるさとの

風景なんて考えられ

行)が二年前から売り出されてる。タイトルは「水田は文化と環境を守る」。ほとんど宣伝しなかったが、九〇年版は三万部近く、九一年版はその倍ほど売れたという。

カルンダーを監修した評論家の富山和子さんは「水田は日本文化の土台。国家の成立は稲作が起因するし、国力はコメが単位の石高(こめたか)であらわした。コメにまつわる言葉は数知れない。水田を失えば、郷土まなも祭りも消えてしま

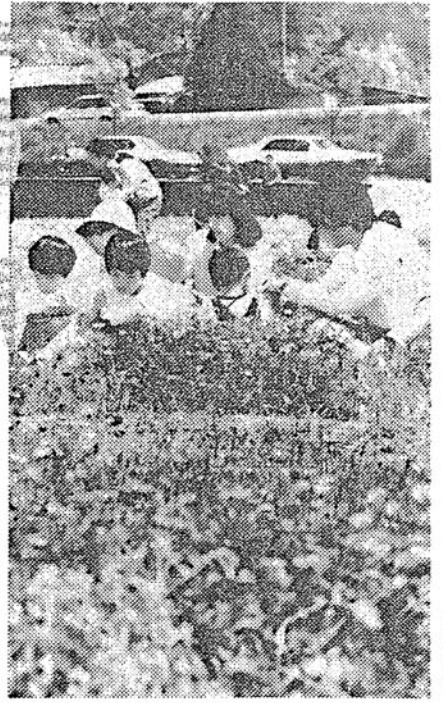
うだろう。だいたい、田んぼのないふるさとの風景なんて考えられ

「景観形成作物」として作付けすれば駆作助成金(十ヘクタリ平均一万四千円)を出すことにした。「水田を、生活環境の一部としても生かしたい」と同省農畜園芸局企画課。

花畑が観光に一役

名刺(めいさつ)・薬師寺を望む奈良市西の京地区で去年夏、コスモスの花畑が観光客の目を引いた。荒れた水田をさらすのはしびないと、農家が植えた。薬師寺の三重塔をバックにした花畑はアマチュア写真家の人気を呼んだ。

農地を単なる生産の場に限定せず、景観や緑地など多面的機能に注目した新たな動きが起りつつある。(おわり)



レンゲ畑で楽しそうにくつろぐ家族連れ。空気が弁当ももうまい＝90年4月下旬、岡山市平山で(高松農協提供)

この連載は、北海道報道部時枝秀樹、秋田支局磯田和昭、仙台支局松井潤、山形支局山田裕紀、福島支局鈴木京一、新潟・長岡支局大久保泰、東京社会部佐藤吉雄、東京通信部編集委員吉田全宏、同部斯波洋、名古屋社会部編集委員竹内宏行、大阪通信部編集委員草野一、福岡・久留米支局浜岸和洋の各記者が担当しました。